

様式3

令和7年 1月17日

青森県議会議長 丸井 裕 殿

青森県議会議員 工藤 慎康



議員派遣結果報告書

下記のとおり議員派遣を終了しましたので、その結果を報告します。

記

1. 派遣目的

1) パラオ共和国のコロナ後の観光振興政策等に係る取組及び入込状況等の調査

- ① コロナを脱した海外のパラオ観光誘客について
- ② 世界遺産登録のセブンティーンアイランドについて
- ③ 自然保護と自然保全の両立における観光事業について
- ④ パラオ共和国のカーボンニュートラルと再生エネルギーについて
- ⑤ 自然景観維持、ゴミ処理、漂着ゴミ、海洋汚染、環境（水に溶けるレジ袋使用効果）について
- ⑥ 戦争遺産の今後の取り組みと観光事業の結びつきについて
- ⑦ 海外旅行者の入国時の検疫と防備について
- ⑧ インバウンド（特に中国の方々）への取り組み
- ⑨ パラオにおける観光がガイド育成の取り組み（資格制度）について
- ⑩ パラオ観光事業のスタイルとビジョンについて

2) 青森県出身者戦没者に係る現在の遺骨収集等調査

- ① ペリリュー島日本戦没者遺骨収集推進協会の遺骨発掘状況視察
- ② 戦没者埋葬場所や遺骨収集状況についてパラオ政府歴史保存局と意見交換
- ③ 戦争遺産登録について
- ④ 戦没者埋葬地の今後について

3) 現地小学校の教育状況の調査研究



未だ帰還を果たせずにいる大東亜戦争にてパラオ諸島における戦闘で戦死した本県出身者の遺骨の状況確認と、それらを支援する本県の団体の現地における活動調査。及び、当時の歴史が今後本県に及ぼす人、経済、政治に関する影響を調査する。

青森県基本計画の主題である「青森新時代への架け橋」。この主題の出発点は本県における長い歴史の顕彰を以て、明るい未来へ力強く歩む事が示されています。その歴史を想う時、世界遺産に認定された北海道・北東北の縄文遺跡群の様な歴史的にも内容的にも素晴らしい歴史的資産が真っ先に脳裏に浮かびます。その様な華々しい歴史ばかりだと嬉しい限りですが実際は悲しい歴史もあります。

約80年前、軍民併せて約310万人の犠牲を出した未曾有の戦災、大東亜戦争があった事は忘れられない悲しい歴史です。本県においても毎年、慰霊祭が実施され当時の犠牲になった方々を思い出す節目があります。しかし、その想いがまだ届いていない箇所がある事はあまり知られておりません。

今回視察先として示しましたパラオ諸島は大東亜戦争において日本軍守備隊の約1万人が玉砕した地であります。玉砕する程の苛烈な戦闘が展開された同地ですが一般の住民にはほぼ犠牲が無かった稀有な戦闘でもありました。それは当時の日本軍守備隊の地域に対する想いがあっての功績であり、玉砕し負けはしましたが現地の人々はその勇敢さ、誠実さを今もなお顕彰してくれております。一方、日本ではその歴史は終戦と共に長く忘れられていました。聞くところによれば100人に3人程しかその歴史を知らないとも言われております。

その様な中においても、戦死した将兵の遺族は長年にわたり現地へ赴き慰霊を続け、更には長年実施されてこなかった遺骨の収集、帰還事業に自費で取り組んで来ました。本県においては第14師団ペリリュー島戦車隊の会青森分会事務局が窓口となり取り組んできました。私としても2014年より、本県選出の江渡 聡徳 衆議院議員の関係、第14師団ペリリュー島戦車隊の会青森分会の関係で遺骨、遺構調査に関わる事となり、以後、現地にも赴き、日本軍将兵、特に本県出身者の遺骨帰還事業に取り組んで参りました。

その取り組みにおいて大きく動いたのが翌2015年4月9日でした。天皇、皇后両陛下が戦後初めてパラオ共和国のペリリュー島を公式訪問あそばされました。長年の遺族、関係者の努力が積み重なり認められた瞬間であり、これからに向けての大きな歩みとなりました。

年々少なくなる遺族、先細りであった遺骨・遺構調査は息を吹き返し、遺族以外の強力も多く得られる様になってきました。2018年には大量に遺棄された戦車群や装備も新たに発見されました。正にこれからいよいよという時、コロナ禍が訪れました。調査はもちろんのこと、交流も全て止まってしまいました。私も含め、関係者は悔しい時間を過ごす事となりました。

しかし、本年、調査の再開が決まりました。4年以上に及ぶ空白を埋めるべく、民間は動きを活発化させております。私も青森県の県議会議員として本県を本拠地とする支援団体の活動状況を調査し、広くその状況、未だ帰還できない本県出身者が居る事を知らしめたく考えております。また、日本人が忘れていた先人（先輩）の雄姿を未だに留めてくれている、

また、親日家と言われるパラオの方々との交流を通じて、本県とパラオの新たな繋がり、未来への繋がりを模索したいと考えております。

最後に、既に発見されている戦争遺構の一つの戦車にはある文字が書かれておりました。平仮名で「むつ」と。故郷に想いを寄せた兵が自身の所属する戦車へ名前を付けたものと推測されます。華々しい歴史と同様に、忘れてはならない悲しい歴史も同じく顕彰するべきと思っております。遠いパラオの地で散った兵が抱いていた郷土愛に報いるべく、今を生きる、これからを生きる我々はその歴史の顕彰を力強く推進して行かなくてはならないのではないのでしょうか。

以上の趣旨により、本県出身戦死者の遺骨の帰還実現、パラオとの今後に向けた関係性構築の可能性を調査すべく派遣提案を致します。

2. 派遣場所

パラオ共和国

・コロール島

- －在パラオ日本国大使館及び大使との面談
- －パラオ本島州知事との意見交換
- －パラオ政府観光局
- －パラオ政府歴史保存局
- －パラオ観光視察現地ツアー会社視察

・ペリリュー島

- －ペリリュー島州知事との意見交換
- －同島小学校訪問
- －戦跡視察
- －島民との意見交換
- －ペリリュー島日本戦没者遺骨収集推進協会と意見交換
- －アンガウル島州知事との意見交換

・バベルダオブ島 ガスパン州・アルモノグイ州

- －ガスパン州知事との意見交換
- －アルモノグイ州知事との意見交換
- －観光資源活用状況及び戦争遺産活用状況視察

3. 派遣期間（日程表添付）

令和6年12月11日～令和6年12月20日

4. 派遣結果

別紙のとおり